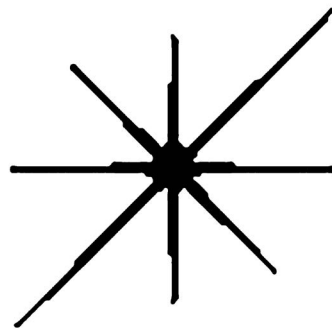


コメット通信 63

['25 年 10 月号特別付録]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

偶成記

——夕暮れまでの喫茶店（3）

中村邦生

子どもの遠近法——見つけた、何を？（その1）

廃校の庭にて

都幾川の支流の槻川にかかる橋を渡りながら、水のうねりの行方を見つめた。前日の大雨のせいか、川の水位が上昇し流れは勢いづいている。この勢いのまま水流は嵐山溪谷をへて、都幾川、入間川と合流し、やがては荒川となって東京湾に到りつくはずだ。

いつもは車を使って訪ねる場所だが、今回は電車とバスを乗り継いできた。東武東上線・小川町駅からパークヒル行のバスに乗り下里で下車、小川和紙センターを左に見て右折し、歩くこと15分。畑道を進むと、古い平屋の木造校舎が現われる。教室ひとつと教職員棟だけの小川小学校旧下里分校だ。2011年の廃校後、2018年4月に用務員室を改装して「分校カフェ MOZART（モザート）」という名の喫茶店となった。

残暑の終わりかけた秋のはじめ、まだ紅葉の気配はなく、カフェの背後の仙元山も濃い緑を残している。校庭から300メートルほど前方の小山の麓に広がる竹藪も、風に揺れてなお青々と光る。

どの季節にきても、のどかな里山の風景を楽しめる心落ち着く場所だが、校舎も周りの景観も私の小学校時代の記憶に重なるところはない。在学した小学校は4つを数えるのであるが、どこも大勢の生徒をかかえる都会の学校で、杉並の富士見ヶ丘小学校だけは農家の屋敷林の点在する地域にあったが、6年生の児童数だけでも約160人におよび、ゆったりとした時間の流れる里山の環境とは無縁だった。

それでも、「分校カフェ MOZART（モザート）」を訪れると、なぜ懐かしさを感じるのだろう。誰もが経験することだろうが、自分の思い出とは取り立てて結びつかない景観なのに、その場に身を置くと懐かしい気分が湧き起こることがある。この「分校カフェ」がそうした場所なのだ。

懐かしさとは仮の言葉で、ある固有の場所から発せられる一回性の複層的な気分なのかもしれない。そのときその場所でしか体験できない、とりあえず懐かしさと名づけられたこの未知の感情——。それがどのような情動の回路を刺戟するのか定かでないにせよ、忘却の淵に沈んでいた物語を呼び戻す。具体的な事実に逢着することもあれば、幽明の融け合う幻想域をさまようこともある。北杜夫なら、それを〈個人の心の神話〉と呼ぶかもしれない。

人はなぜ追憶を語るのだろうか。

どの民族にも神話があるように、どの個人にも心の神話があるものだ。その神話は次第にうすれ、やがて時間の深みのなかに姿を失うように見える。（『幽霊——或る幼年と青春の物語』）

人の心の奥底に身を隠し、ことによると生涯一度も自覚されないまま過ぎる「時間の深み」のなかに沈む〈物語／心の神話〉があるのだ。無意志的な記憶として、ふいに遭遇する瞬間の訪れを待つ。かといって、紅茶に浸したマドレーヌ菓子がきっかけとなって、失われた時間への長い回想が誘発される、あのフランスの大作家の描いた名高い感情のドラマは、私の場合、いささかまぶしく華麗すぎるように思える。それならむしろ、第4編「ソドムとゴモラ」で主人公の祖母への思慕が、ショートブーツの最初のボタンに触れた瞬間にあふれ出るシーンのほうが、いまのところしっかりと気持ちに合う。

私の場合、ほとんどが物語の形をなさないイメージの片影であり、記憶の断章的な小編なのだ。さらにまた、折々に思い出した本の一節が記憶を揺らし、紡ぎ出された言葉を波立たせる場合もある。

懐古にひたるというのではなく、いわばぼんやりとした清新な放心とも言うべき時間にのんびりと我が身を置く。視線はあいまいにさまよう。たとえば、校庭に残っている登り棒とか、桜の木の枝振りとか、教室の隅に転がる黒板消しが、追懐の風らしきものをもたらしただにしても、過去にさかのぼる気分というより、いま見ている景観や諸物がふわりと浮遊の感覚を生じさせ、まどろみを誘いそうになる。

ランチメニューの「平飼卵のコッペパンサンド定食」や「揚げパン定食」は、コッペパンという名称にこそ懐かしさを感じるものの、バターの香りなど皆無のそっけない雑味のコッペパンと脱脂粉乳の昔の給食経験者からすれば、この定食の盛り付けは晴れの日の馳走に等しい。小川町は有機野菜の産地として知られるだけあって、添えられている野菜はすべて有機栽培のものだ。今回はランチタイムを外れての到着のため、定食はすべて売り切れだった。私はいったんベランダ席にすわったものの、日射しが強く室内の窓側の席に移動した。

入り口でスリッパに履き替えるのだが、「来客用、上野台中学校」と記してある。古くなったものもらい受けたのだろう。テーブルは、教室の机と椅子を利用したものだ。中年の女性グループ2組と若いカップルから、賑やかな笑い声が上がる。私はオーガニック・コーヒーとカボチャタルトを味わった。

校庭にはいずれもワイヤーで拘束したジャングルジム、登り棒、すべり台、シーソーがあり、廃タイヤが隅に埋め込まれている。使用不可の遊具ならば、撤去してもいいようなものだが、これらがなければかつて小学校であった佇まいは消え去るであろう。一方で、現役的な時間が停止した物たちの姿にこそ、何やら生々しい相貌を感じるのは、どうしてか。

椅子が外され、鉄棒だけが残るブランコに今回も目がとまった。6年前の初夏に訪れたとき、「分校カフェ」のこの役目を終えたブランコが、不穏な空気の記憶を呼び寄せたことがあったのだ。のんびりした時間にひたっていたはずが、いままた同じ追想の淵に立っている。

ある秋の終わり、恒例の行事で私は8人ほどのゼミ生たちと、中世創建の岩殿観音（埼玉県東松山市）に向かう参道を歩いていた。（坂上田村麻呂による、この古刹に住む龍退治の伝説は短編小説「悪霊封じ、ひーふーみー、よいむなやー」で触れた。）

この参道は昭和初期まで多くの旅籠や店や遊郭で賑わい、江戸時代には多くの参拝客・遊覧客が足を運ぶ門前町をなしていた。いまでも、当時の屋号を示す手作りの看板が立っている。鍛冶屋、塗師

屋、油屋、建具屋、足袋屋、そして正学院、中院、正存院などの寺社も多い。

途中、右手に熊野神社に続く細い山道が見え、登り口に小さな児童公園がある。遊具はすべり台とブランコだけだ。学生とのちぐはぐな会話があったのは、このブランコを通り過ぎてからである。

「何か変だったね、さっきのブランコ見た？ 風もないのにふたつ交互に揺れていたけど、どうしてだろう？」

当然、みな気がついたと思い私はたずねた。意味が判らないのか、怖そうな出来事に近寄りたくないのか、誰もこの話題に乗ってこない。私は少しひんやりした気分を感じて、同じ質問を繰り返した。すると、ゼミ長の K 本君が応じた。

「何のことですか？ 片方のブランコ、少しくらい揺れるのは普通じゃないですか。だって、隣の黄色の T シャツの女の子、けっこう勢いよく漕いでいましたからね」

「えっ、そんな子がいた？ 誰も乗っていなかったように見えたけど」

「いえ、1 人いましたよ。みなに確かめてみましょうか？」

K 本君は、みなを振り返って私の話を伝えた。どよめきにまじって、「えー、こわい話ね」という誰かの声とともに、無人で揺れるブランコを目撃譚はあっさり否定された。

それでも気になり、仕事の終わった夕暮れ近く、私はふたたび参道に戻り、熊野神社下の児童公園に行った。あたりは薄く夕影が広がり始めていた。

子どもたちの姿はない。微風が過ぎていくのに、ブランコは静止したままだ。私は少女の乗っていた台にすわった。尻にかすかな温みを感じて胸が騒いだが、たぶん陽のなごりだろう。

「いまから、熊野神社に上がっていくおつもりかな？」

背後から声がかかって、私は慌てて立ち上がった。ブランコから軽く軋み音が響いた。

初老の夫婦がこちらを見つめている。男は両手に大きなプラスチックの買物袋をさげ、小丸煎餅が覗いていた。

「やめておいたほうがいいですよ。今朝がた、でっかいイノシシが 2 頭も出たんで」と男が理由を言った。

「イノシシ？ いや、もともと行く予定はありませんので。ご親切にありがとうございます」

「昼間もお見えになっていましたね？ 学生さんたちといっしょに」

妻が続け、公園から出て道路の方に戻るように手招きした。

「あのブランコですが、すわらないほうがいいですよ」

声を潜めたわけではないが、男が思わせぶりの言い方をした。すると妻が制止にかかった。

「あんた、よその方にいちいち言うことでもないでしょう。じゃ、どうも失礼しました。お気をつけて散歩なさってください」

「ちょっと、お待ちください。何のことでしょう？ さしつかえなかったら、お話をうかがいたいのですが」

「いやー、どうするか。……じゃ、簡単に」

「簡単でけっこうです、お願いします」

「あなたがすわっていたブランコですけど、あれに乗るのは、サキコという女の子だけなんです。よくに決まっているわけじゃないんですが、20 年前から自然とそうなるって」

「20 年前？」

「サキコは、いなくなってから、ずっと 6 歳のままです」

男の話を妻が引き取って、こう付け加えた。

「たまに空っぽなのにブランコだけ動いているときがあって、それ、サキコが揺らしているんです。でも、誰の目にも姿は見えませんが。ただ、にぎやかなことが好きなのか、お祭りになると見える人があるみたいで……」

私の学生たちがそれを目撃したことは口にしなかった。

2人が去った後、もう一度ブランコに乗ってみた。参道を囲む森や沿道の家々が、ゆったりと夕闇を攪拌しながら揺れ動いたが、人の気配はなく、異変の兆しも感じられなかった。

それ以降、私の視覚経験に何か変化が生じたとすれば、近所でもどこでも小学校や児童公園の無人のブランコを眺めると、風が吹いているわけでもないのに、心なしか揺れているように感じられるようになったことだ。姿の見えない子どもが漕いでいるような動きのリズムで揺れていることもある。

しかし、ごく単純な法則に気づいた。足を止めて眺めると揺れは止まる。歩き出して見つめると、また揺れは始める。少なくともこの法則を拠り所にしておかないと、夢魔に引きずり込まれそうになる。しかし妙なことに、折につけ私は夢魔の境域へ近づくことを望んでいるらしいのだ。

コーヒーを追加注文し、「分校カフェ MOZART（モザート）」の庭の遊具をあらためて見渡す。

遊具は旧小学校の証を示すオブジェとして残されているが、新たな時間を生き直す安らぎよりも窮屈な思いをいだいているように感じられた。しかし、別の思いも動く。椅子を撤去されたブランコをはじめ、ワイヤーで縛られたりしている他の遊具類も、機能の停止、廃棄、廃物であるが故に、むしろ過去へと溯行する記憶への動感を生むのではないか。

現役でないことが、そうした追懷を引き寄せる。とりわけここは里山の廃校を再利用したところである。少年時代の「時間の深み」への想いが動く場所のはずなのだ。

秘密の司令部

子ども時代をめぐるアフォリズムが思い浮かぶ。たとえば、澁澤龍彦は、こんな言葉を残している。

薄明の幼年期にこそ、大人になった私たちの感情生活を支配する、秘密の司令部があるのではあるまいか。そして私たちはただ、その存在に気づかないだけのことなのではあるまいか。

（『少女コレクション序説』）

私たちの記憶の奥に潜んでいる「幼年期」こそ、大人になっても日々の感情をコントロールしている「秘密の司令部」なのだ、と澁澤は子どもの感受性の超越的な働きを指摘する。大人にとってのこうした子どもの持つ優越的な意識と役割に関心を向ける言説は数多くある。たとえば、夢と物質の想像力の哲学者ガストン・バシュラールも述べている。

子ども時代は生涯続く、大人としての生活の広大な部分を活気づけるために子ども時代は再び現われる。

（『火の詩学』、本間邦雄訳）

子ども時代の蘇生と復活こそが、大人の日常に生のエネルギーを与える。こうした大人にとっての子どもの主導的な役割にふれた、シャルル・ボードレールの先がけ的なアフォリズムはよく知られている。

天才とは、意のままに取り戻された幼年期にほかならない。（「現代生活の画家」，中村試訳）

この言葉を少し敷衍して考えれば、天才が天才たるゆえんは、思いのままに子ども時代を想起できることにあるのだ。

いずれの引用文も、子どもは大人の回顧的な時間のなかに置いてこそ意味が生じるということである。ただし、バシュラールの言うように「大人としての生活の広大な部分を活気づける」存在として、子どもをあくまでも生の肯定的なヴィジョンとみなすこと、言い換えれば、子どもを自己蘇生の原点と捉える文学的なテーマに初めて注目したのは、ワーズワースとかブレイクに代表されるイギリスロマン派の詩人たちであった。

ロマン派から始まる文学的な子ども像の歴史的な変遷を考察する場合、ピーター・カヴニーの名著『子どものイメージ——文学における「無垢」の変遷』が示唆的な論点を提供するのだが、いずれ改めて言及することにする。

むしろここで問題にしておきたいのは、子ども時代への回想的なエピソードの持つ屈折率に関わることである。生の肯定的なヴィジョンでもなければ、否定的なヴィジョンでもない、というかむしろそのいずれも包含する記憶の屈折の様相だ。

特段に回想的情熱を求めるエピソードではないにせよ、記憶の辺縁から呼び寄せるには、想起のための何らかの具体的な物質的インデックスがいる。いま記憶の薄闇から招き寄せられた道具は5段の跳び箱である。

小学5年の黄金週間明け、体育の授業。担任のM先生は、結核のために静岡の伊東市の病院で療養中だった。ほとんどの科目は女性代用教員のF先生が受け持っていたが、なぜかその日の体育は隣のクラスのS先生の担当になった。

S先生の得意分野はダンス指導、40代後半だが、長身で手足の長いしなやかな身のこなしの人だった。スキンヘッドなので生徒たちは密かに「電球」と呼んでいた。

ことによるとフォークダンスをやらされるのか？ 私は「オクラホマミクサー」を嫌悪していたので、逃げ出す算段を考えた。ところが、フォークダンスは体育館で女子のみ、男子はグラウンドで跳び箱の授業であった。

安堵したものの、ダンスは女子のリーダーに任せ、跳び箱の男子に対しては、つきっきりで本格的な指導となった。着地にはダンスの振付師のように美しいポーズを求める。お手本はさすがのものがあつたと記憶している。

跳び箱は少しずつ高くなり、5段が全員の目標になった。しかし私だけ、いくら助走を工夫しても5段がクリアできない。クラス一番の小柄で体育が苦手のはずのYも跳んだ。

残るは私だけだ。終業のベルが鳴るのも近い。女の子たちも体育館から集まってきた。みな視線が集まる。このまま時間切れかもしれないと思いながら、私は気持ちを昂ぶらせ、最後の挑戦に気持ちを集中させた。

すると屈辱的なことが起こった。その教師は跳び箱を4段に減らしたのである。どうしても授業を時間内に終わらせなかったのだろう。

しかし、次のチャンスには5段を跳べると私は確信していた。ポーズを美しく決めるイメージもあった。ならば、この見苦しい状況を根本から転覆させなければならない、と思った。もちろんそのよう

な難しい言葉で子どもの私が考えていたわけではないが、それでも教師の教育的判断あるいは授業運営上の配慮を打ち壊してしまいたいという反抗心が兆したことは確かだ。

教師からもクラスメートからも、早くやれと苛立つ空気が伝わってくる。4段に手加減したのだから、楽々と跳びこし、めでたく授業は終了になることを誰もが願っていた。

私は助走スピードを上げていき、踏み切り台の手前からわざと身体をやや左に傾け、ぎこちなく両手をついた後、跳び箱を流れた右足で蹴り上げた。予期していた以上に、崩れた箱が派手な音を立てた。軽蔑と失笑と同情とが入り交じった声が湧きたった。私はここで「してやったり」と平然と笑って見せるはずだったが、蹴った足の爪先が痛んで余裕をなくし、これは誤算だった。

まだアラン・シリトーの『長距離ランナーの孤独』など知るよしもない。少年院に送られたスミスは、院長にその才能を見込まれ、代表選手として陸上競技大会に出場する。彼は抜群の走力を発揮し、2位以下を大きく引き離す。ところがゴール直前で足を止め、あえて選外となる。痛快にも、院長をはじめ大人たちの思惑を裏切るのだ。仮にその小説を読んでいたにしても、抵抗のスケールが異なりすぎて、考えは及ばなかったであろう。

それは措くとして、この跳び箱をめぐる少年時代への追憶は、〈心の神話〉として、あるいは大人になってからの「秘密の司令部」として、どのような意味を持ってきたのか。あまり深く考えてきたとは言いがたいのであるが、強いて約言すれば、「コンテキスト外し」とでもなろうか。窮地に陥ったとき、その問題の困難を成り立たせているコンテキスト（文脈）そのものを突き崩し、前提となる状況や言説を転換させ、新たな認識に置き換えてしまうのだ。ときに周囲の誤解に包まれる。だが、誤解の海を泳ぐ愉楽も人生にはあろうと自分に言い聞かせる。これが跳び箱事件から引き継ぐ、私の大人になってからの屈折率の高い「秘密の司令部」と言えないこともないのだが、膠着した議論の場以外で多用したことはない。

夕暮れ前に

「分校カフェ MOZART（モザート）」の閉店時間は4時、いま3時半だが客は私ひとりになった。調理場からは後片づけの音が聞こえる。こちらの落ち着いた様子を察してか、「まだ、だいじょうぶですよ。ごゆっくりどうぞ」と中年の女性が顔を覗かせた。他の喫茶店ならば、夕暮れ近くまで過ごすはずだが、帰りのバスの時刻の都合もあり、私は席を立った。

今回の夕暮れの一文はどうしたらいいか。

バス停に向かって畑道を戻りながら、20年前に東秩父村を訪れたときの幻の夕景が思い浮かんだ。小川町と並んで東秩父村は和紙（細川紙）の里として知られている。その日、私は紙作りの体験工房を見学した後、特に行く当てもなく車で槻川沿いの道を進んだ。途中、馬頭観音像に誘われるように左折し、山道を上ると「銀鱗亭」と書かれた看板が目に入った。「世界一小さな釣り堀センター」と添え書きがしてある。私は「小さな」と「センター」の愉快的言葉の並列に心惹かれた。

細い私道を下っていくと駐車場があり、釣り堀らしき場所から水音が伝わってきた。「世界一小さい」にしては大きく、およそ25平方メートルほどだったであろうか。たっぷりと清水も湛えている。いわな、やまめ、あまごが釣れるらしい。しかし、その日は火曜で、あいにく定休日に当たっていた。

私は県道に戻り、さらに車を走らせた。今度は馬頭観音ではなく、赤い前垂れを掛けた地蔵に誘われて右折した。

花の盛りをまわっているが、車の窓から見下ろす緑に埋まった山里は、遅い午後の時間の光を集めていた。

道は進むにつれて細くなっていく。対向車がくれば難儀なことになると不安がつのも、引き返したかったが、Uターンできそうな場所はない。進むしかないのだが、迷い道の感覚が深くなっていく。幸いにも舗装はしっかりできている。やがてまた県道に出たところで、突き当たりに細道が続き、集落の屋根が見えた。道の入り口に「日本一小さな釣り堀」の何かの冗談のような案内板が立っていた。「世界一」に慎ましく対抗した釣り堀だろうか。慎ましやかなものへの愛好の気分がにわかにつのって、ためらうことなく車を進めた。

藁葺きの古い農家があったが、案内を請うても返事はなかった。ガレージにも車は見当たらない。釣り堀はどこなのかと庭を見渡すと、母屋と物置の間に井戸のようなものがあり、「つりぼり、ココです」と子どものような字で書かれた板が下がっていた。すのこを外すと、幅1メートルにもならない瓶が現われ、湧き水が静かに盛り上がるような動きを見せていた。底の方に魚影らしきものも確認できる。

折しも、夕陽が射してきた。光のくる方向が判らなかったが、母屋の脇から陽射しが細く伸び、ガレージの車庫入れ用に設えられたミラーに反射して、釣り堀に届いていた。夕陽が薄絹のようにかぶさっている。だが、それは束の間のこと、陽射しがゆるやかに移動し、水底はいっそう暗さを増した。

後日、この釣り堀のことを知人たちに話したところ、東秩父まで出かけた者たちもいた。しかし、誰も行き着かなかった。ネットにも載っていない。私自身、2年後に再訪を試みたが、どうしても同じルートの迷い道を再現できずに終わった。迷走の僥倖がもたらした一度だけの夕景だが、私はいつでも心のなかに甦らせることができる。

執筆者について――

中村邦生（なかむらくに お） 1946年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説には、『[チェーホフの夜](#)』（2009年）、『[転落譚](#)』（2011年）、『[幽明譚](#)』、『[ブラック・ノート抄](#)』（いずれも2022年）、『[変声譚](#)』（2024年）などが、批評には、『未完の小島信夫』（共著、2009年）がある。